

ピグリンブランドの話



ビアトリクス・ポター さく・え

たちばな こうじ やく

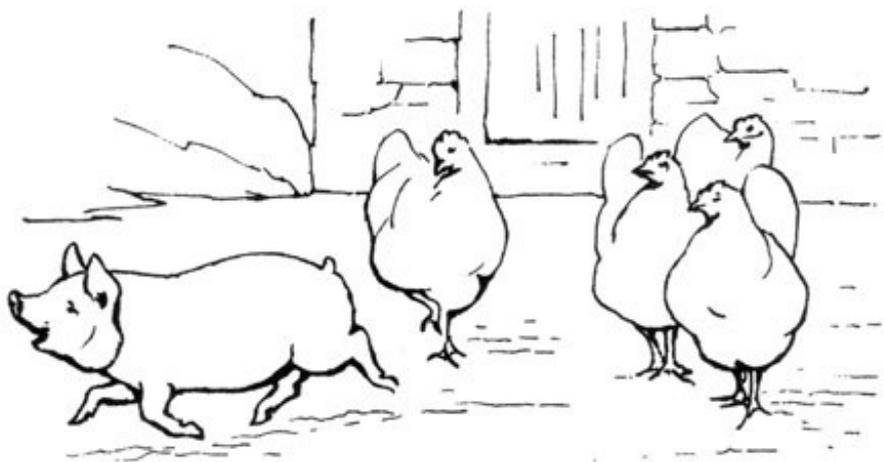


セシリとチャーリーにささげる
クリスマスのぶたのおはなし





昔むかしあるところに、トンソクおばさんっていう年とったぶたがいたんだ。子どもが8ぴきいてね。4ひきがメスで、名前はムツリ、チュウチュウ、クスクス、ポッチリ。4ひきがオスで、アレクザンダ、ピグリブランド、カンパイ、ズングリっていった。ズングリは、事故でしっぽをなくしてた。



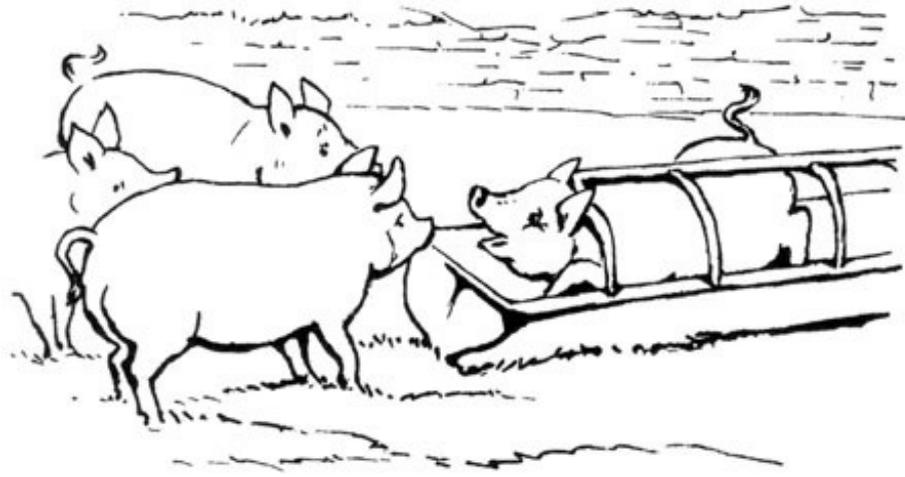
8ぴきのこぶたたちは、じつに食欲旺盛だった。

「あれまあまあ！ この子たちの食べること、ほんによく食べること！」
トンソクおばさんはそう言って、子どもたちを誇らしげにながめやった。

突然、おそろしい悲鳴があがった。

アレクザンダが、豚のえさ箱についでる輪っかにもぐりこんで、身動きとれなくなったんだ。

トンソクおばさんと私は、後足をつかんで引っ張り出してやった。



カンパイは、すでにひんしゆくをかっていた。洗濯の日だっていうのに、せっけんを食べちゃったのさ。

それからしばらくして、洗いたての衣類が入ったかごの中から、1ぴきの汚いこぶたが見つかった。

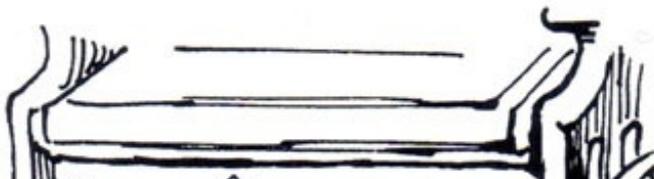


「チョッ、チョッ、チョッ！ 誰なのこの子は？」

トンソクおばさんは鼻を鳴らした。

今この家にいる豚たちは、みんなピンク色かピンクに黒いぶちの入ったやつなのに、そのこぶたは全身が煤けたように真っ黒だったんだ。

バスタブにつけてみたところ、そいつはクスクスだとわかった。





それから庭に出てみると、ムツリとチュウチュウがにんじんを根こそぎにしてるじゃないか。

私は連中をひっぱたいて、耳をつかんで引きずり出した。ムツリのやつ私をかじろうとしたよ。



「トンソクさん、トンソクのおばさん！ あなたは立派なかただ。でも子どもたちはなっちゃんないね。ポッチリとピグリンブランドのほかは、みんな何かしらやらかしてくれたよ」

「あれまあ！」とトンソクおばさんはため息をついた。

「しかもあんなにミルクを飲まれちゃ、牝牛をもう一頭飼わなきゃならないよ！ 良い子のポッチリは家の手伝いに残すとしても、他の子はよそへやらなくちゃな。オスのこ

ぶた4ひきにメスのこぶた4ひきじゃ、どうしたって多すぎるもの」

「あれあれまあ」とトンソクおばさん。「あの子らがいなくなれば、食べ物は余分になりますわ」



そんなわけで、カンパイとチュウチュウは手押し車に、ズングリとクスクスとムツツリは荷車に乗せられて、農場をあとにしたんだ。

残った二ひきの男の子、ピグリブランドとアレクザンダは、市場にやることになった。





私たちは彼らのコートにブラシをかけ、しっぽを巻いてやり、小さな顔を洗い、庭でお別れを告げた。

トンソクおばさんは、大きなハンカチで目をぬぐい、ピグリンブランドの鼻を拭いて、泣いた。それからアレクザンダの鼻を拭いて、泣いた。そしてそのハンカチをポッチリに渡した。

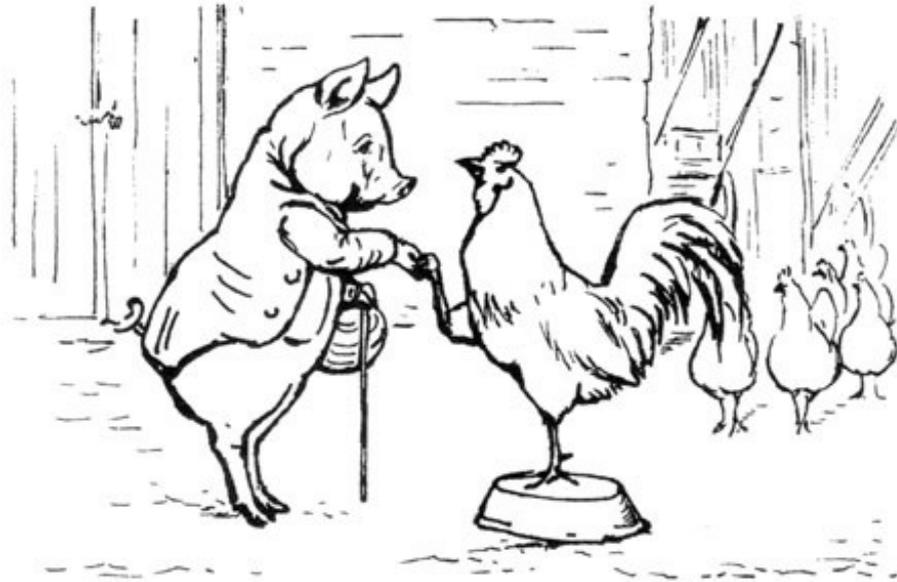
トンソクおばさんはため息と小言まじりに、むすこたちにこう言った――



「いいかいピグリンブランド、ピグリンブランド坊や、お前は市場に行くんだよ。きょうだいのアレクザンダと手をつないでお行き。よそゆきの服を大事にね、鼻をかむのを忘れないようにね」

(トンソクおばさんはポッチリに渡したハンカチをまた借りた)

「罌と、鶏小屋と、ベーコンエッグに気をつけて。いつも後足で歩くんだよ」
ピグリンブランドは、きまじめなこぶただったので、母親の言うことをかしくまってる聞いていた。涙がほっぺたをしたたり落ちた。



トンソクおばさんは、もう一方を向いた。
「いいかいアレクザンダ坊や、きょうだいのー」
「ブヒーブヒー！」とアレクザンダはふざけた。
「きょうだいのピグリンブランドといっしょに、お前、市場へ行かなきゃならないんだよ。よそゆきのー」
「ブヒーブヒーブヒー！」とアレクザンダはまたさえぎった。
「困った子だよ」とトンソクおばさん。
「標識とマイルストーンをよく見るんだよ、ニシンの骨をむさぼるんじゃありませんよー」



「それから、覚えておきなさい」と私は声を高くして言った。「ひとたび州境を越えたら、お前たちはもう戻ってこられないんだよ。――アレクザンダ、ちゃんと聞いてないね。ここに、二ひきの豚がランカシャー州の市場に行くのを許可した鑑札が二枚ある。――聞いて、アレクザンダ。私は警察からこの紙をもらうのにずいぶんと骨を折ったんだよ」



ピグリブランドは真剣に聞き入っていたけれど、アレクザンダは上の空で手のほどこし方がなかった。
私はその紙を、なくさないよう、2ひきのチョッキのポケットの内側にピンで留めてやった。





トンソクおばさんは、めいめいに小さな荷物を持たせ、紙のおひねりにハツカ飴を8つ包んでやった。その飴には、ためになるいい言葉が書いてあるんだ。そうして、彼らは旅立っていった。



ピグリンブランドとアレクザンダは、急ぎ足で1マイル進んだ。少なくともピグリンは1マイルだった。アレクザンダは、道のはしからはしを跳ね回って、もう半マイルくらいよけいに歩いてた。踊ったり、きょうだいをつねったりしながら、歌をうたって――

このぶた いちばへ きました
このぶた おうちで おるすばん
このぶた おにくを ひとかじり ー

「かあさんたちがおべんとうに何を持たせてくれたか見てみないか、ピグリン？」
ピグリンブランドとアレクザンダは腰をおろし、包みをほどいた。アレクザンダはあっというまに自分のぶんの弁当をたいらげてしまった。

彼はハッカ飴もとっくにぜんぶ食べてしまっていたので、

「君のをひとつおくれよ、いいだろ、ピグリン」

「でもぼく、いざって時のために、これはとっておきたいんだ」とピグリンブランドは口をにごした。

アレクザンダは甲高く笑い、豚の鑑札を留めてあったピンでピグリンをつつついた。ピグリンが叩くと、彼はピンを取り落とし、かわりにピグリンのピンを取ろうとしたので、鑑札がごちゃごちゃになってしまった。ピグリンブランドはアレクザンダにくっついてかかった。

それでも、じきに彼らは仲直りをして、いっしょに歌いながら走りだした。

ふえふきむすこのトムやトム
ぶたをぬすんでとんずらだ！
けれどもトムがふけるのは
“おかのかなたへ” だけだった！



「何だって、ぼっちゃんたち？ 豚を盗んだって？ 君たち鑑札はどこだね？」
言ったのはおまわりさん。角をまがったところで、あやうくぶつかりそうになったんだ。

ピグリンブランドは鑑札をひっぱりだした。アレクザンダは、あちこち探ったすえ、くしゃくしゃになった何かを手渡した――

「文字入り菓子 2.5オンス、お代3ファージングー 何だねこれは？ 鑑札じゃないじゃないか」

アレクザンダの鼻が目に見えて伸びた。鑑札をなくしてしまったんだ。

「持ってたんです、確かに持ってたんですおまわりさん！」

「飼い主も、持たせずに外にやりはしないだろうな。私はこれから農場を通るところだから、君は一緒に来たまえ」

「僕も戻っていいですか？」とピグリンブランドはたずねた。

「その必要はないね、ぼっちゃん。君の鑑札はちゃんとしとるよ」
ピグリンは一人で行きたくはなかった。雨も降り出していたからなおさらだ。
でも警官相手に口答えするのは利口なことじゃないからね。彼はきょうだいにハツカ飴
を1つあげて、後ろ姿が見えなくなるまで見送った。



アレクザンダの冒険はこうして終わった——警官はお茶の時間のころにわが家へ立ち寄った。濡れておとなしくなった小さな豚をつれて。
私はアレクザンダを近所に片づけることにした。落ち着き先では、彼はまずまずまっとうにやってたよ。



ピグリンブランドは、一人で悄然と歩き続けた。十字路に出ると、そこの標識には、
「市場まで、5マイル」
「丘の上まで、4マイル」
「トンソク農場まで、3マイル」とあった。

ピグリンは愕然とした。今日じゅうに市のある街につくのは望み薄だった。品評会は明日だっていうのに。

アレクザンダの悪ふざけでどれだけ時間を無駄にしたかと思うと、泣きたくなった。



彼は名残惜しそうな目で丘へ続く道を一瞥したものの、雨避けにコートのボタンをかけると、おとなしく市への道を歩きはじめた。行きたくなかなかったんだけどね。混みあった市場にひとりぼっちで立って、じろじろ見られたり押されたりしたあげく、どこかのおひやくしょうに買われていくことを思うと、いやでたまらなかった――

「どこかに小さい畑を持って、じゃがいもをつくって暮らせたらいいのに」とピグリンブランドはつぶやいた。

冷たくなった手をポケットにつっこむと、鑑札が手に触れた。もう一方の手をもう一方のポケットにつっこむと、別の鑑札が触った――アレクザンダのが！

ピグリンは叫び声をあげ、戻ってアレクザンダと警官に追いつこうと、死にものぐるいで走り出した。





でも道を間違えて——いくつも間違えて、そして完全に迷ってしまったんだ。

あたりは暗くなりはじめ、風は鳴き、木々はきしんだりうめいたりした。

ピグリンブランドはふるえあがって泣いた。

「おーいおいおい！ぼく迷子になっちゃった！」



一時間ほどさまよったすえに、森を抜けた。月が雲をすかしてあたりを照らした。そこはピグリンの知らない土地だった。

道は荒野を横ぎってのび、眼下の広い谷で、川が月光に輝いていた。その向こうに——かすむほど遠くに——丘が見えた。



彼は木でできた小屋を見かけて近づき、中に忍びこんだ。

「これは鶏小屋らしいぞ。でもしょうがないや」

とピグリンブランドは言った。びしょ濡れで、寒くて、疲れきっていたからね。

「ベーコンエッグ、ベーコンエッグ！」止まり木の上でめんどりが鳴いた。

「トラップトラップトラップ！コケ、コケ、コケ！」起こされたおんどりが怒って騒いだ。

「トゥマーケット、トゥマーケット！バッサバッサ」その隣でたまごを抱いた白いめんどりが鳴きだした。

ピグリンブランドは不吉な予感におののき、夜があけたらすぐに発とうと心に決めた。さしあたって、彼とめんどりたちは眠りに落ちた。

それから1時間もしないうちに、彼らはみんな起こされてしまった。小屋の持ち主のピーター・トーマス・パイパーソン氏が、ランタンとふた付きのかごを手に、朝市に売りに行く鳥を6羽とりにやってきたんだ。





おんどりの隣にいた白いめんどりをひつつかんだ彼は、そこで、すみっこにもぐりこんでいたピグリンブランドに気がついた。

「ほい、ここにもう一匹」

パイパーソン氏は一言つぶやくと、ピグリンの首ったまをつかんで持ちあげ、かごの中に放りこんだ。その上から、鳴き騒ぐ汚いめんどりを5羽追加した。

6羽の鳥とこぶたを1ぴき入れた重たいかごは、よろよろと引きずられるように丘を下っていった。ピグリンはさんざんに引っかかれながらも、鑑札とハツカ飴をかるうじて服の下に隠すことができた。



しまいには、かごは台所の床にどすんと放り出され、ふたが開いて、ピグリンはつまみ出された。

瞬きながら見上げると、ひどく感じの悪い初老の男が、にたにたと満面の笑みをうかべ

ていた。

「こいつは自分からやってきたんだからな、まったくのところ」
とパイパーソン氏は、ピグリンのポケットをひっくりかえしながら言った。
彼はかごをすみっこに押しやり、めんどりが騒がないよう上から袋をかぶせた。それからやかんを火にかけると、ブーツの紐をほどきにかかった。
ピグリンブランドは小さな丸いすをひきよせて、浅く腰かけ、遠慮がちに手を温めた。
パイパーソン氏は片方のブーツをひっこぬき、それを台所の向こうの壁にむかって投げた。

すると押し殺したような声があがった――

「黙れ！」とパイパーソン氏は言った。

ピグリンブランドは手を温めながら、彼に目をやった。



パイパーソン氏がもう片方のブーツも脱ぎ、同じ方に投げつけると、ふたたび得体のしれない声がした。

「静かにするんだ、いいな？」とパイパーソン氏。

ピグリンはいっそう椅子のはしに寄った。





パイパーソン氏は、おひつからオートミールを取り出して、おかゆをつくりはじめた。ピグリンは、台所の向う側にいる誰かさんが料理の様子を気にしているような気配を感じたものの、あまりに空腹だったので、声の主のことは意識から追いやられてしまった。



パイパーソン氏はおかゆを3皿よそった。自分のぶん、ピグリンのぶん、そして3つ目は――ピグリンをじろりとにらんで――慌ただしくかたづけて、しまいこんだ。ピグリンブランドはつつましく夕飯を食べた。食事のあと、パイパーソン氏は農事暦を調べ、ピグリンのあばらをさわった。ベーコンをつくるにはもう時節はずれだが、かといって飼っておくのは餌代が惜しい。何より、このぶたはよそから来たところをめんどりたちに見られているのだった。

パイパーソン氏は、ベーコンの残りがわずかなのを見て、未練がましい目をピグリンにそそいだ。

「敷物の上で寝るといい」と、ピーター・トーマス・パイパーソン氏は言った。

ピグリンブランドはぐっすり眠った。

朝になると、パイパーソン氏はまたおかゆをつくった。陽気はきのうよりあたたかだった。

パイパーソン氏は、おひつに残ったオートミールの量をしらべて、嫌そうな顔をした――

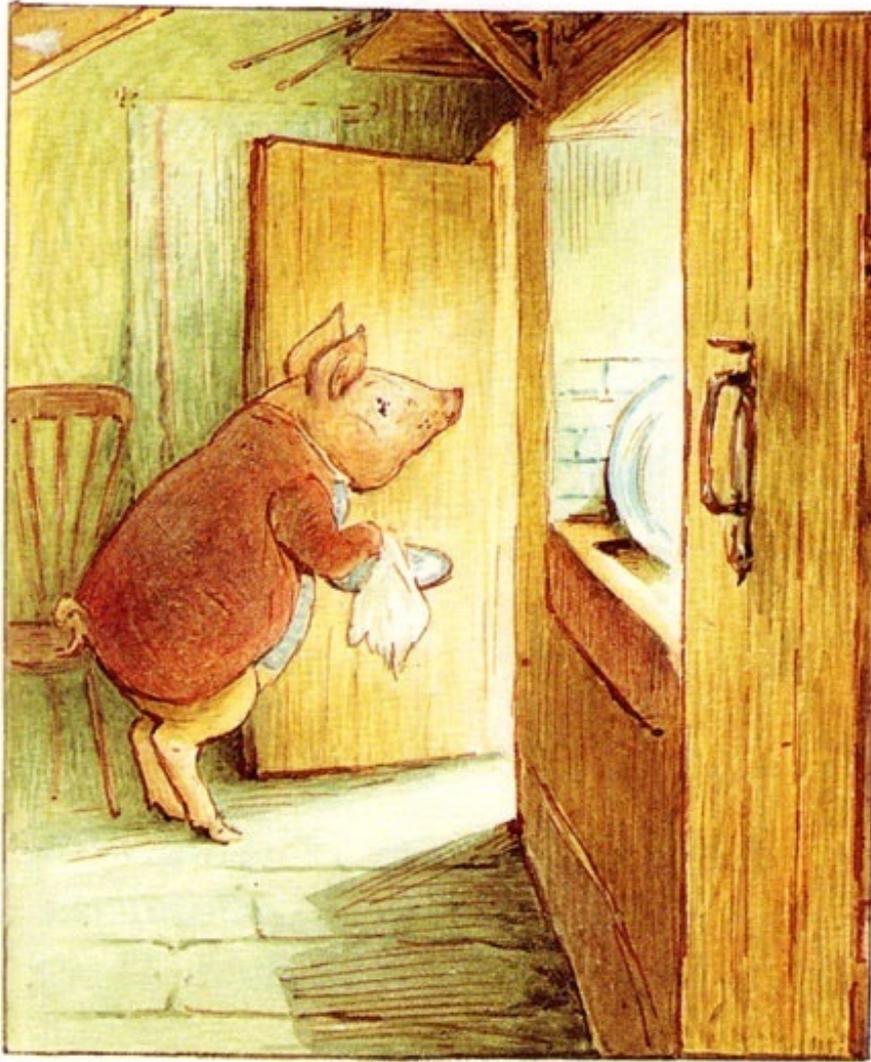
「おまえはじきまたどこかへ行くんだらうな？」と彼はピグリンブランドに言った。

ピグリンが答えるまえに、パイパーソン氏とめんどりを市場まで乗せていってくれる近所の人を迎えに来て、門のところで口笛を吹いた。

パイパーソン氏は、かごを持って急いで出て行きながら、ピグリンに、ドアを閉めてよけいなことを何もしないようにと言い渡した。さもないと「戻ったら皮をはいでやる」と言って。



自分も一緒に乗せていってくれと頼んだら、まだ市場に間に合うかもしれないという思いがピグリンの頭をよぎった。でも、ピーター・トーマス氏を信じて身を任せる気になれなかったんだ。



時間をかけて朝ごはんをたいらげたあと、ピグリンは家のなかを見て回ったけれど、どこにも鍵がかかっていた。台所の裏の流し場で、じゃがいもの皮が入ったバケツを見つけたピグリンは、皮を食べ、バケツでおかゆの皿を洗った。歌をうたいながら――

ふえふきトムのおおさわぎ
ぼっちゃんじょうちゃんよっといで
こどもらみんなとんできた
“おかのかなたへ”きくために！

そこに突然、小さなくぐもった声が重なったんだ――

おかのかなたの そらとおく
かぜがりボンを ふきとばす！

ピグリンブランドは、拭いていたお皿を置いて、耳を澄ませた。



長いことためらってから、ピグリンはつま先だって歩いて行き、ドアのかげから表の台所をのぞいた。誰もいない。

もうしばらくおいて、ピグリンは鍵のかかった戸棚に近づき、鍵穴のにおいをかいだ。何の音もしない。

ピグリンはまた長いこと考え込んだすえ、戸の下からハッカ飴を差し入れてみた。それは吸い込まれるように消えたんだ。

その日のうちに、ピグリンは残しておいた6つのハッカ飴をぜんぶ差し入れちゃったのさ。

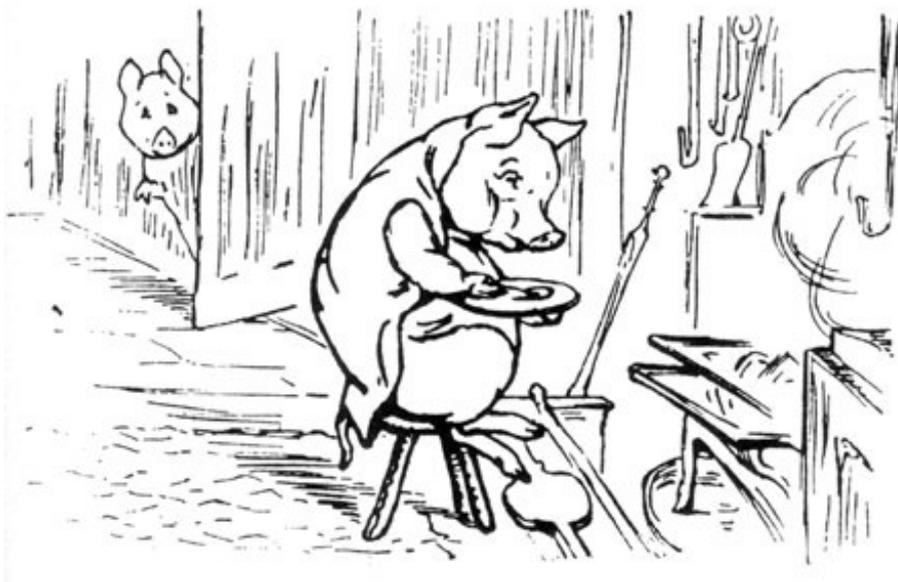


パイパーソン氏が戻ってくると、ピグリンが暖炉のまえで、炉をきれいにそうじして、やかんにお湯をわかして待っていた。オートミールはとりだせなかったから、食事は

つくっておけなかったけれど。

パイパーソン氏はたいそう機嫌をよくして、ピグリンの背中をたたき、おかゆを多めにつくってくれたうえにオートミールの入ったおひつに鍵をかけ忘れた。戸棚には鍵をかけたけど、戸をちゃんと閉めなかった。

それから、明日の昼までは何があろうと起こさないようピグリンに申し渡して、さっさと寝に行ってしまった。



ピグリンブランドは、炉端に座って夕食を食べていた。

そしたらだしぬけに小さな声が横から――

「わたしピグウィグ。おかゆもつつくってちょうだい！」

ピグリンは飛び上がって振り向いた。



となりに、たいそう愛らしいバークシャー種の黒豚が、にっこり笑って立っていたんだ。

キラキラした小さな細い目と、二重あごと、短い上向いた鼻の女の子で、指をピグリンのお皿に向けていた。彼は急いでお皿を彼女に渡し、オートミールのおひつの方へ後じさった――

「君はどうしてここに来たの？」とピグリンブランドはたずねた。

「盗まれたの」とピグウィグは口いっぱいにおかゆをほおぼりながら答えた。

ピグリンは、自分のぶんのオートミールをおひつから勝手に取り出した。

「何のために？」

「ベーコンとか、ハムとか」ピグウィグは陽気に答えた。

「どうして逃げないの？」ピグリンはぞっとして叫んだ。



「ごはんのあとでね」とピグウィグはきっぱり言った。

ピグリンブランドはおかゆをつくり足しながら、まばゆげに彼女を見つめていた。

2杯目を食べ終わると、彼女は立ち上がって、さて出発だというように周りを見回した。

「暗いうちは無理だよ」とピグリンブランドは言った。

ピグウィグは眉をくもらせた。

「昼間なら道がわかるかい？」

「川向こうの丘から、この小さな白い家が見えるってことは知ってるわ。あなたはどっちに行くの、ぶたくん？」

「市場だよ――ぼく、豚の鑑札を二枚持ってるんだ。橋まで送ってあげようか、君が

よければだけど」

ピグリンが、椅子のはしっこに腰かけてもじもじしながら言うと、ピグウィグは大喜びして、あれこれと質問をあびせかけ、ピグリンを辟易させた。



弱りきったピグリンは、目を閉じて寝たふりを決めこんだ。

すると彼女は静かになり、そのうちあたりにハッカの香りがただよいだした。

「そのアメ食べてなかったの」ピグリンは飛び起きた。

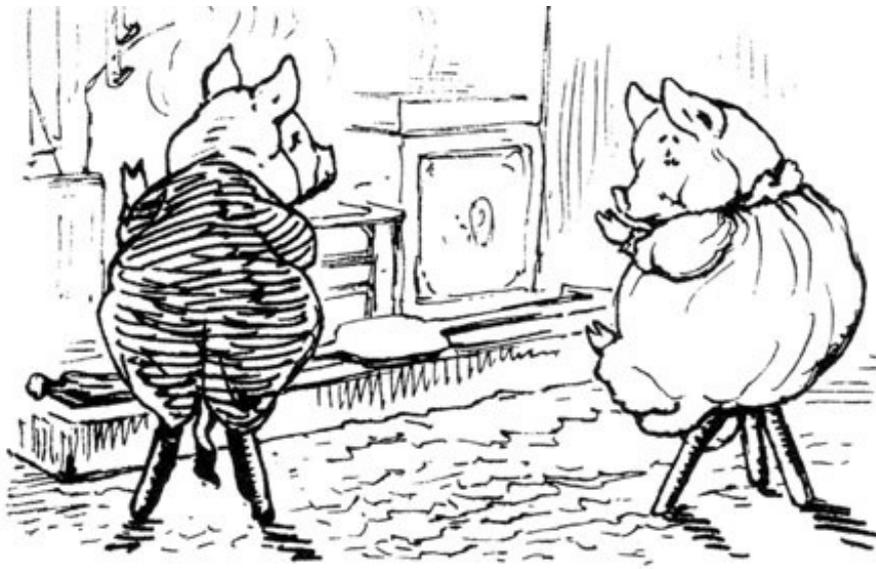
「はしっこだけ食べたの」ピグウィグは答えながら、暖炉の明かりでアメに書かれた文字を熱心に読みとろうとしていた。

「やめた方がいいと思うよ。天井ごしに、だんなさんが匂いをかぎつけるかもしれない」

不安そうなピグリンの声で、ピグウィグはべとついたハッカ飴をポケットにもどし、

「何か歌って」とせがんできた。

「ごめん……歯が痛いんだ」ピグリンはうろたえきってそう答えた。



「じゃあ、私が歌うわ」とピグウィグ。「ところどころハミングになっても気にしないで？ 歌詞を忘れちゃったの」

ピグリンは異議をとねえないことにして、半分目を閉じて座り、彼女をうかがい見た。彼女は頭を振り、ゆらゆら揺れて拍子をとりながら、少し鼻にかかった甘い声で歌いだした――

ゆかいなとしよりかあさんぶたは
ぶたごやずまいで こぶたがさんびき
（トゥルルールルー） アンアンアン
こぶたはいった ブヒーブヒー！



3, 4小節ほどまちがえずに歌ったよ。でも、節ごとに頭はこっくりこっくりと低くなっていき、小さなキラキラした目もとじられていって――

さんびきのこぶたは やせにやせ
やせてすっかり いいぐあい
なのにいえない アンアンアン
いおうとしない ブヒーブヒー！
なのにいえない ー

ピグウィグは頭を揺らしながらどンドンうつむいていき、とうとう小さな丸いボールのように転がって、敷物のうでで眠りこんでしまったのさ。

ピグリブランドは、そっと近づいて、椅子のおおい布を上にかけてやった。



ピグリは、自分まで寝ついてしまっはいけないと思ったからね。夜じゅうずっとコオロギの鳴き声と、頭上からひびくパイパーソン氏のいびきを聞いていた。



翌朝、暁闇のころ、ピグリンは荷物をまとめてピグウィグを起こした。

彼女は落ち着きをなくし、半ばおびえているようだった。

「まだ暗いわ！ わたしたち道がわかるかしら？」

「おんどりは鳴いたよ。めんどりたちにみつかる前にここを出ないと。パイパーソンさんに鳴いて知らせるかもしれない」

ピグウィグは再びすわりこんで、泣きはじめた。

「出ようピグウィグ。目が慣れれば見えるようになるよ。ほら！ めんどりたちがさわざはじめた！」

ピグリンは、めんどりたちに「シッ」なんて言いもしなかった。おとなしいぶただったし、かごの中の居心地悪さは承知してたからね。





彼は家の戸をそっと開けて外に出ると、後ろ手にそっと閉めた。

外には庭らしいものはなかった。パイパーソン家の周りは、鶏どもがみんな掻き荒らしてしまってたんだ。

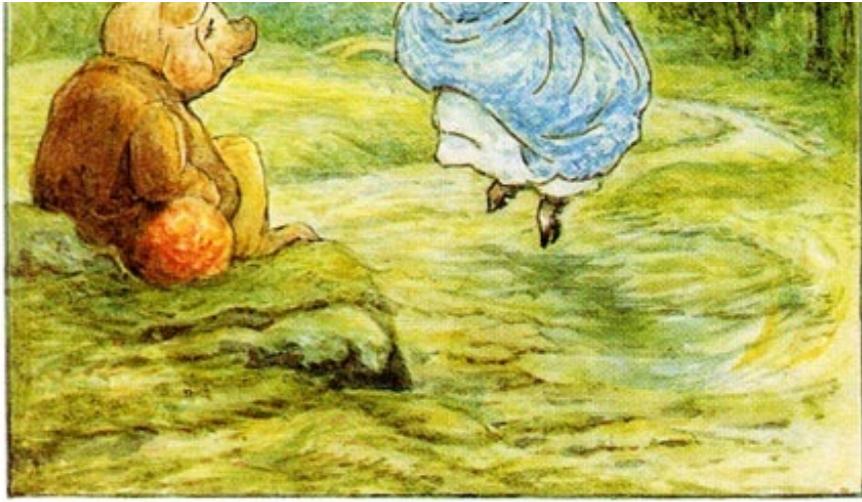
2ひきのぶたは、手をつないで荒れはてた敷地をぬけ、道の方へ逃げていった。



荒野を歩いていくうちに、日が昇り、丘の頂上にまばゆい光がさした。

日光は丘の斜面をくだり、静かな緑の谷間にのびていった。そこには、小さな白い家々が、畑や果樹園にかこまれて、寄りあうように建っていた。





「あそこはウエストモーランド州だわ」とピグウィグは言い、ピグリンの手を離すと、歌いながら踊り始めた――

ふえふきむすこのトムやトム
ぶたをぬすんでとんずらだ！
けれどもトムにふけるのは
“おかのかなたへ” だけだった！

「おいで、ピグウィグ。みんなが起き出す前に、橋に着かなくちゃ」
「あなたは どうして市場に行きたいの？ ピグリン」とピグウィグがたずねてきた。
「行きたくはないんだよ。ぼく、ジャガイモを育てたくて」
「ハッカ飴食べる？」とピグウィグ。
ピグリンはむっとしていらなうと言った。
「かわいそうに歯が痛むの？」とピグウィグはたずねた。
ピグリンは鼻を鳴らした。



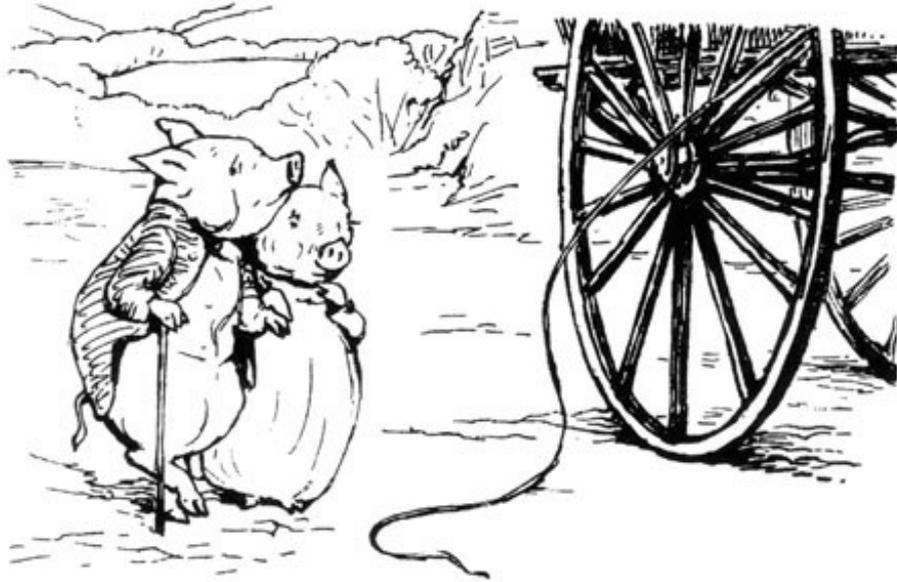
ピグウィグはハッカ飴を自分で食べてしまい、道の反対側へ歩いていった。
「ピグウィグ！ 壁にかくれて。おひゃくしょうさんが畑をたがやしてる」
ピグウィグはこちら側に戻ってきた。彼らは州境をさして急いで丘を下った。



突然ピグリンは立ち止まった。わだちの音が聞こえる。
ゆっくりと丘をのぼってきたのは、雑貨を配達する荷馬車だった。
雑貨商は、馬の後ろに手綱を垂らして、新聞を読んでいた。



「ハッカ飴を口から出して、ピグウィグ、走らなきゃならないかもしれない。一言もしゃべらないで、ぼくにまかせて。もう橋は見えてるのに！」
気の毒なピグリンは泣きそうになりながら、ピグウィグの腕につかまり、ひどいびっこをひいて歩き出した。



雑貨商は新聞に読みふけっていて、そのまま通り過ぎそうだった。でも馬が気づいて飛びのき、いなないてしまった。

雑貨商は荷車をななめに止め、むちを取って地面に垂らした。

「おい、おまえらどこに行くんだ？」

ピグリンブランドはぽかんとした顔をして彼を見あげた。



「耳が悪いのか？ おまえら市場に行くつもりか？」

ピグリンはゆっくりうなずいた。

「だろうと思った。市はきのうだぜ。鑑札を見せてみな」

ピグリンは、馬の後ろ脚をじっと見た。蹄鉄に石がかんでいる。

雑貨商はむちを鳴らした。

「鑑札だよ。豚の鑑札は？」

ピグリンはポケットを全部ひっくりかえしてから、鑑札を差し出した。

雑貨商はそれに目を通したけど、まだ納得いかないようだった。

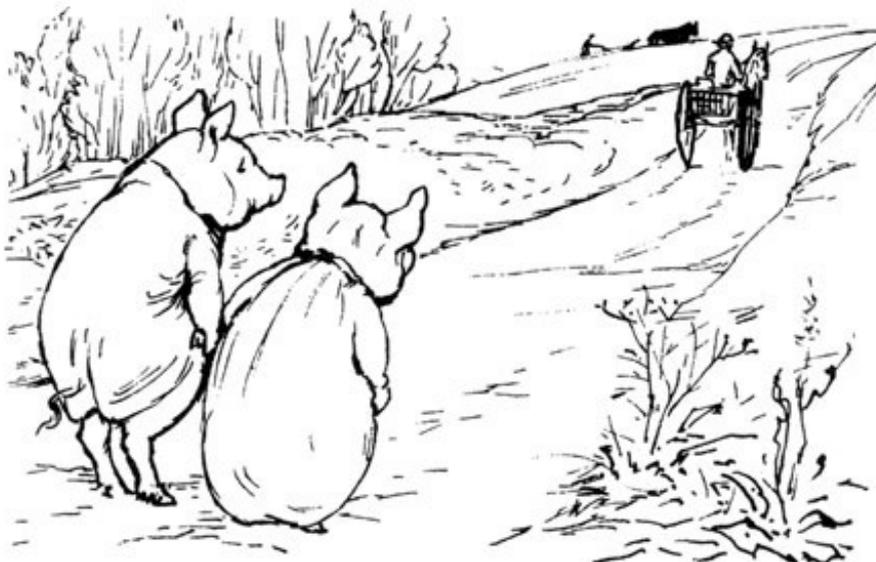
「こっちのぶたは女の子なのに、アレクザンダっていうんかよ？」

ピグウィグは口を開いたが、すぐに閉じた。ピグリンが、ぜんそくの発作でも起こしたように咳き込んだんだ。



雑貨商は、新聞の広告欄に指を走らせた——「紛失物、盗難品、迷い出た家畜、見つけた者に10シリング進呈」ってところに。

彼はピグウィグに疑わしそうな目を向けると、荷馬車の上で立ち上がって、畑にいるおひやくしょうに口笛で合図した。



「あそこへ行ってあの人と話してくるあいだ、ここで待ってろ」と、雑貨商は手綱をとりながら言った。

ぶたが油断ならない生き物だってことは、彼とて承知していたさ。けどまさか、こんなひどいびっこのぶたなら逃げられるわけがないと思ったんだ！



「まだだよ、ピグウィグ、あの人が振り返るかもしれない」

その通りだった。

雑貨商は振り返り、2ひきのぶたが道の真ん中につったままなのを見た。それから、馬のひづめに目をやった。自分の馬もびっこをひいているのに気づいたんだ。おひやくしょうのところまで行って、蹄鉄から石を取り除くのに、いくらか手間がかかった。

「さあピグウィグ、いまだ！」 ピグリンブランドは言った。

こんなに速く走ったぶたはいなかったよ！

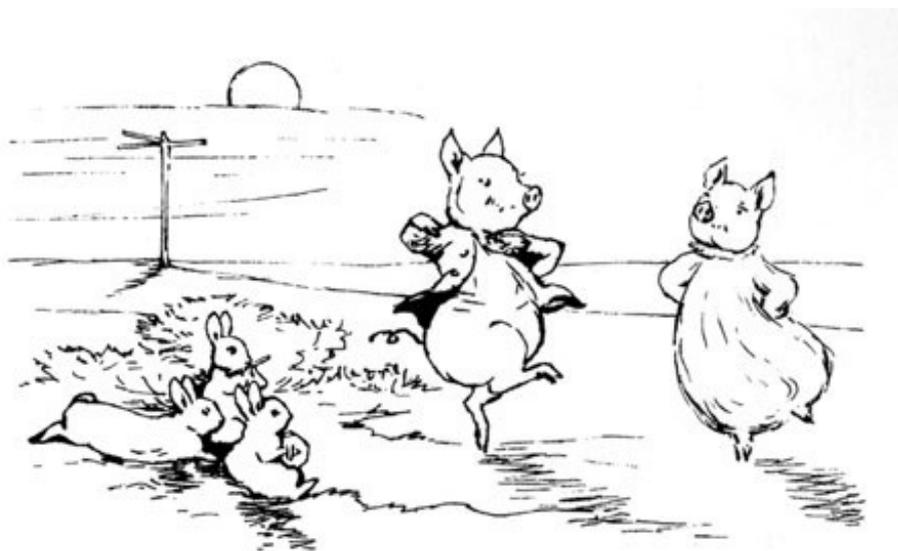
彼らは鳴きながら、競うように、長く白い丘を橋をめざして駆け下った。

小太りのピグウィグはペチコートをはためかせ、どたばたと足音を立ててとんだりはね

たりした。



2ひきは丘を走って走って走りおり、ふもとの平らな緑の芝地をつきつて、砂利とい草の河原を抜け、川に着き、橋へ来て——手を取りあって渡ったんだ——



そしてたどりついた“おかのかなた”の土地で、ピグウィグとピグリンブランドは、いっしょにダンスを踊ったのさ！

おしまい

ポター作品リスト

Beatrix Potter作品の日本における著作権は消滅し、パブリックドメインに帰しています。
翻訳の底本はFREDERICK WARNE出版の The original and authorized edition です。

1. The Tale of Peter Rabbit (1902) 【[ピーターラビットの話](#) : 2012.3】
2. The Tale of Squirrel Nutkin (1903) 【[リスのナトキンの話](#) : 2012.3】
3. The Tailor of Gloucester (1903) 【[グロスターの仕立屋](#) : 2012.4】
4. The Tale of Benjamin Bunny (1904) 【[ベンジャミンバニーの話](#) : 2012.3】
5. The Tale of Two Bad Mice (1904) 【[二匹のいたずらねずみの話](#) : 2012.12】
6. The Tale of Mrs. Tiggly-Winkle (1905) 【[ティギーウィンクルさんの話](#) : 2012.5】
7. The Tale of the Pie and the Patty-Pan (1905) 【パイと焼き型の話 : 執筆中】
8. The Tale of Mr. Jeremy Fisher (1906)
9. The Story of A Fierce Bad Rabbit (1906) 【[あらくれやくざうさぎ物語](#) : 2012.12】
10. The Story of Miss Moppet (1906) 【[モペット嬢物語](#) : 2012.12】
11. The Tale of Tom Kitten (1907) 【子ねこのトムの話 : 執筆中】
12. The Tale of Jemima Puddle-Duck (1908)
13. The Tale of Samuel Whiskers or, The Roly-Poly Pudding (1908)
【[サミュエル・ウィスカースの話 もしくは、うずまきプディング](#) : 2013.4】
14. The Tale of the Flopsy Bunnies (1909) 【[フロプシーのちびっこたちの話](#) : 2012.4】
15. The Tale of Ginger and Pickles (1909) 【[ジンジャーとピクルズの話](#) : 2013.1】
16. The Tale of Mrs. Tittlemouse (1910)
17. The Tale of Timmy Tiptoes (1911)
18. The Tale of Mr. Tod (1912) 【[ミスタートッドの話](#) : 2012.11】
19. The Tale of Pigling Bland (1913) 【[ピグリブランドの話](#) : 2013.12】 **NEW**
20. Appley Daply's Nursery Rhymes (1917) 【[アプリー・ダプリーの童謡](#) : 2012.4】
21. The Tale of Johnny Town-Mouse (1918)
22. Cecily Parsley's Nursery Rhymes (1922) 【[セシリ・パセリの童謡](#) : 2012.4】
23. The Tale of Little Pig Robinson (1930) 【[こぶたのロビンソンの話](#) : 執筆中】

原文参照 [Project Gutenberg : Books by Potter, Beatrix](#)

ピグリンブランドの話

<http://p.booklog.jp/book/80661>

作者：ピアトリクス・ポター

訳者：橘 柑子

作者プロフィール：<http://ja.wikipedia.org/wiki/ピアトリクス・ポター>

訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokijikudou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80661>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80661>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ